

平成 21年 3月 5日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007年度～2008年度
 課題番号：19530639
 研究課題名（和文）臨床心理士養成のためのイニシャルケースのあり方に関する研究
 研究課題名（英文）Useful training before take
 charge of initial case in master's
 program of clinical psychology
 研究代表者 飽田 典子（AKUTA NORIKO）
 広島国際大学・総合人間科学研究科・教授
 研究者番号：90268053

研究成果の概要：臨床心理士の養成システムが、(財)日本臨床心理士資格認定協会の指導のもとに制度化されたものの、内容面については大学院間の格差が大きい。そこでイニシャルケースを担当するまでの事前教育で多くの大学が採用しているロールプレイに着目して、その体験のさせ方について検討した。役割の決め方や振り返りの視点など、ロールプレイが意味ある事前教育となるためのたたき台を目指して、例をあげて具体的に検討した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1200,000	360,000	1,560,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：セラピスト論、イニシャルケース

1. 研究開始当初の背景

(財)日本臨床心理士資格認定協会による指定大学院制度が発足し、学生は有資格の教員の指導のもとに、大学院在学中にはじめての臨床経験を積むことが当然のことになった。このようにカリキュラムはほぼ均一になったものの、実際に事例を担当させる前の教育(事前教育)の質は、教員の専門性をはじめ多くの面で大学間のバラツキが大きいものと思われる。良質な臨床心理士を輩出するための教育のあり方が模索される時代背景のもとに、本研究は計画された。

2. 研究の目的

第1種指定大学院に義務づけられている「相談室紀要」にみるイニシャルケースの様相を概観した上で、大学院在学中の学生が生涯で“初めて”心理臨床事例を担当することに伴う様々な思いを明らかにし、臨床心理士養成のあり方について検討することを目的として計画した。しかし、“イニシャルケースを担当する”という特殊な状況をスーパーストレスフルな状況とみて、院生にそれ以上の負荷は掛けられないと主張する同僚の教員がいて、この目的および方法は断念せざるを得なかった。

代わって、事前教育で大切なものとして、

多くの大学院が取りいれているロールプレイ（以下 RP とする）に注目して、現状として RP がどれだけ緻密で丁寧な指導のもとに行われているかに焦点を当てることにした。

RP を事前教育の一環として授業で取り上げる際に、どのように学生に体験をさせ、何を学んでもらうべきか、そのために大切な指導の観点はなにかを検討することにした。

3. 研究の方法

本研究は以下の 5 つの研究から成り立っている。

(1) 指定大学院の「相談室紀要」にみる「臨床心理実習」の実態～A 大学院における模擬面接の紹介～

(2) M1 前期 7 月の時点での事例担当への期待感～；質問紙調査

(3) 「臨床心理面接演習」における RP の実際～B 指定大学院生の RP の分析から～

(4) 「臨床心理実習」(学部の授業)における RP の実際～C 大学臨床心理学科の学部 3 年生の RP の分析～

イニシャルケース担当前の訓練～RP を中心に事前教育のねらいと体験課程について考える。

(5) 大学院修了後 3 年未満の臨床心理士へのアンケート調査

まとめ；今後の課題

各研究の方法・内容について若干の説明を加えると、

(1) はいわゆる文献研究で、多くの「相談室紀要」の中から、本研究が目的としていることに最も近い試みをしていた A 大学院の実践を紹介した。

(2) 某指定大学院在籍中の M1 の院生を対象に、前期終了直前の 7 月に、後期からいよいよ事例を担当することについての様々な気持ちについて質問紙調査を行った。

(3) は B 指定大学院の M1 の授業で行った RP の逐語録をもとに、RP の実際を分析し、授業で RP を取り入れる際の手順、指導者としての心得などについて検討した。

(4) C 大学の臨床心理学科 3 年生の授業(選択)で、初めて RP を体験することになった学生の感想文を基に、臨床心理士という将来の目標があまり明確ではない学部の段階で、RP とは何か、役割を取って演じるとはどのような学習なのかを理解出来るような指示の仕方について検討した。

(5) は指定大学院を修了して 3～年の臨床心理士を対象に、大学院での授業について質問紙調査を行い、回収時に面接に補足調査を行った。

4. 研究成果

(1) は仲間関係で行う RP は、どこか本物と向き合う緊張感に欠けるとの不満から、

趣旨を理解して協力を申し出た学部の学生を相手に模擬面接を課した試みを紹介した。模擬面接は一回の限定ではあるが、実際の面接に近い条件(50分の面接、面接は相談室の実際の面接室で行うなど)で心理面接を行うものである。面接の内容は、面接協力者の了解を得て、映像と音声による記録を課し、それをもとに、丁寧な事前指導を行った様子が報告されている。この研究をわざわざ紹介したのは、本研究者が授業で RP を行った際に感じていた「なれあい」感や、真剣味の不足といった RP に対する思いから、試行カウンセリングほど院生にも教員にも負担が掛からない模擬面接という方法に強い関心を引かれたからに他ならない。RP の体験内容をもっと深みのあるものにするにはできないだろうかという、本研究を思い立つ発端に関わる研究で、大いに刺激された。

50分という現実の面接時間に沿った模擬面接の経験は、院生たちに以下のような振り返りの感想をもたらした。「(学部生に)言われた一言に対してそれを消化して、じっくり理解する前になんでもいいから相槌を打って言葉を返してしまった」「はっきりと気持ちが理解できて頭が整理できてことばが出せる前に、結論を出してあげてしまった」「話されていることをことばにする前に、こっちでことばにしてしまった」。それを受けて執筆者が得た結論は、「理論に書かれている現象がありありと体験セッションの中で感じられていることがわかる。それだけ、実際の経験をすることとは豊富な学びの資源を含んでいるといえるだろう。しかし、体験して感じられたことを言語化したり、理論に照らし合わせる機会がなければ、その資源を有効利用したとはいえない」であった。

この結論から研究者たちが学んだことは、RP は本番前の練習に過ぎないかもしれないが、そこで本番さながらの経験をし、さらに経験したことをどのような角度から言語化させるかによって、RP の事前教育としての意義が左右されるということではなかろうか。

(2) この研究は M1 の後期から始まる心理相談室での面接実習に対する期待感(限段階で、“自分が事例を担当する”ということについて、どのくらい期待感がありますか?)、事例担当に対する意欲(10月に入ってすぐ事例を担当するとしたら、うまくやれそうな気持ちはどのくらいありますか?)、事例担当に対する不安(現段階で、事例を担当することについての不安は、どの程度ですか?)について 0～10 の 11 段階で評定を求めた。また授業で取り上げた RP について、心理臨床家として訓練を受けている立場として、どのような学習体験であったかについて

自由記述で回答を求めた。

9名の院生から回答が寄せられ、事例担当についての期待感の平均は6.11 (SD=2.15)で、中央値(5.5)よりやや高めであった。事例担当に対する自信は、中央値(5.5)より低い平均(3.67; SD=1.66)であった。また事例担当に対する意欲は中央値に近い5.00 (SD=2.29)が平均であった。次に事例担当に対する不安感の平均が7.56 (SD=2.70)で総じて不安は高い結果が得られた。

事例担当についての期待感が高いのは、大学院進学のための目的が、臨床心理士の受験資格取得という非常に明確なものがあることと無関係ではないように理解した。自信については平均値は妥当に思われるが、個人差が大きく、評定8~1に分布している。指導する立場としては、自信過剰者こそが要注意で、2年間の在学期間中に、客観的に自身を振り返る視点を確実に身につけるべく指導の手を緩めてはならないように思われる。次の意欲は評定点6~8が4名、2~4が5名で、高い群と低い群に2分された。前問で評定8を示した回答者はこの質問に対しても、評定点が8で、事例を担当することについての不安感総じて手高い評価点のなかで、ただ1人最低の2であった(この回答者が中央値に近い回答であったならば、平均値はもっと高い結果となったであろうと思われる(他は5以上で、評価点10というものが3名いた)。これらのことから、この院生は内省力にやや問題のある院生ではないかとの危惧から、実際の実習では特に注意して指導をしていくことが必要と思われた。

またRPについての感想としては、「少人数でRP後話し合うことができ、うまくいかなかったことを自分で知ることができたり、改善するためにいろいろ話し合うことができ、それを今後もRPを続けることで、ケースをもったときに行かせていけるのではないかと思う」、「逐語をおこすこと、音声を聞きながら字を追うこと、その時のTh役の気持ちなどから今まで気がつかなかった自分のくせ、ものの考え方を、逃げる場がない状況で知ることができる」、「逐語をすることによって、RP中に気づけなかった自分の様子を客観的に知ることができた」、「逐語をみんなで振り返るので、自分も客観的に自分を見渡し、周りから意見がもらえたので、よかった」などの感想が寄せられた。

(3) 授業では紙上応答法→紙上応答法の事例をRPでやってみる→自発的に場面設定をしてRPをやってみる、の流れに沿って5回のセッションを費やしてRPを実施した。そしてそれぞれの逐語記録にコメントを付して、Th・C1の応答の問題点を検討した。

(4) は学部の3年生(選択)が、夏期休業中に施設実習に行くのに先だって、実習生と

しての心構えを講義で説明するのではなく、RPによって理解させようとする授業がある。その試みから得られた知見と大学院生の「臨床心理面接演習」で実際に行われたRPの逐語録から、次のような示唆を得ることができた。

研究(4)で実施した授業でのRPは、紙上応答法→紙上応答法の事例をRPでやる→臨床場面を自発的に設定してRPを行うという順序で行ったが、RPを授業で取り入れるにはもっとべつの順序があるのではないかという考えに至った。そこで考えた手順を以下に示すと、

第一段階;いきなり臨床的な場面設定をしたRPに入るのではなく、ある態度を演じる(役割取得の)段階を丁寧に体験させる。目的は日常生活で何気なく起きている事柄を意識させることと、情緒的な反応に目を向けることを意識させること。

内容としては相手を拒否する体験あるいは拒否される体験を試みる。その手順として、C1役は①言葉を発しないで、ペアを組んだ相手(Th役)を態度で拒否をする。②主に言葉で相手を拒否する(ゼスチュアは添える程度で)。③言葉と態度の両方で①②よりも激しく拒否をする。このRPは1分半程度でよく、むしろ長時間やる必要はない。短い時間ではあっても強烈な印象をTh役に与える効果がある。

第二段階;Th役に求められる基本的な態度である受容のRPを体験する。このRPではC1役は好きな食べ物、思い出深い場所など自分自身を語ることで、相手(Th役)が自分(のdocumentary story)をどの程度受容(あるいは共感)してくれたかを実感することに意義がある。架空の人物を演じても本当に受容してもらえたかどうか、微妙なズレがつかめないのが、自分自身を語るがこの段階の鍵である。

このRPでは演じられた内容に関して、自分の立場(C1役、Th役、観察者役のそれぞれ)からどう感じたかを、振り返る作業を行う。つまり自分が演じた役割についての気持ち、感想、内省あるいは演じた時に意識して心がけた態度、そのことが相手に与えた影響(相手はどう感じていたと思うか)などについて、出来る限り細かく・詳しく言葉にして表現することを求める。

この第二段階では、振り返りの目を養成する意図もふくまれている。心理臨床家の養成ということでは、Th-C1関係について振り返る目をもつことが必須である。しかしこうした視点は、自分からはなかなか出てこない<初学者には気づきにくい、思いもよらない、あるいは考えたこともないような>視点である。したがって振り返り用紙にこのような視点の項目を用意して、院生たちに記入を

求めることによって、そのような視点に気づかせる意図が含まれている。

第三段階；臨床的な場面設定で、C1役、Th役、観察者役をそれぞれ体験する。

(5) 質問紙に回答を寄せてくれたのは3名でしかなかったが、それぞれ異なる大学院の出身であったため、各大学院の特徴が浮き彫りにされた。3名の修了後の平均年数は2年11ヶ月で、調査時の勤務態勢は常勤が1名、あとの2名は非常勤であった。非常勤の1名は1つの情短施設で週30時間の勤務、もう1名は福祉・教育・医療機関でそれぞれ週8～9時間勤務ということであった。

データが限られているので、一般化はできないが、得られた情報をまとめると、

大学院在学中に事例を担当した数は0～3名と、大学院によって差があった。事例担当前に全員が経験した教育は、臨床心理に関する講義・演習、RP、カンファレンスの聴講および参加、学外施設の見学・実習の経験であった。この中でRPについての質問「当時を思い出してRPという学習方法は、あなたにとってどのような体験として残っていますか？」に対する回答は、A氏は「基本的な面接の進め方、応答の仕方を練習できた。セラピストの応答の仕方によって、クライアントの感じ方が変わるということに気付いた」。B氏「目の前の応答には気をつけたが、ケース全体を理解したり、展開を計画する必要があるという（この段階では）意識は薄かった」。C氏「C1役にしてもTh役にしても、時間の間は相手と自分しかいないと思って、向きあわなくてはならないと感じた」というもので、修了後時間が経過し過ぎているためか、参考になるような意見が寄せられなくて残念であった。この種の調査はリアルタイムで行わないと、新鮮な印象が薄らいでしまうことを教えられた結果であった。同様に試行カウンセリングが義務であった大学院が2校あったが、逐語録をもとにスーパーヴィジョン（以下SVとする）を受けた所はなく、2校とも印象を基にしたSVであった。スーパーヴァイザー（以下SVerとする）に関しては、修士論文の指導教員という所と大学が契約をしている学外のSVerという所に分かれた。学外者の場合は契約がきちんとしている故か、回数・時間が一定であったが、指導教員の場合は、教員の都合で時間や回数が一定ではなかった。いずれも院生の経済的な負担はなかったようであるが、客観的な記録に頼らずに行われたSVということにいささかその意義が疑問に思われた。

研究2で紹介した院生のRPに関する感想にあったように、特にこれから資格の取得を考えている初学者には、機器による客観的な記録は欠かせない条件ではないかと考え

るが、世の中には記録を取ることを邪道と考え、目の前のC1の様子を観察することに重きを置く学派もあるようなので、記録のあり方については、それぞれの学派で異なっている現状のようである。

研究5は回収資料が少なく、多くを得ることができなかった。各指定大学院の相談室の紀要からは明らかにならない事前教育の様子を内側から詳しく知りたいと計画したが、中途半端に終わってしまった感が否めない。

全体として、事前教育のあり方に迫ることができず、RPの体験のさせ方を多少検討するに留まってしまったが、本研究で取り上げたテーマはそれだけ大きな課題といえよう。今後の課題として残されたものの方が多いが、現時点での到着地点を報告した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

第28回日本心理臨床学会で発表の予定

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飽田典子 (AKUTA NORIKO)

広島国際大学・総合人間科学研究科・教授
研究者番号：90268053

(2) 研究分担者

中嶋みどり (NAKAJIMA MIDORI)

広島国際大学・心理科学部・助教
研究者番号：10412339

(3) 連携研究者